

## 弥四郎小屋の男中さん

尾瀬ヶ原十字路口に弥四郎小屋という山小屋がある。尾瀬沼の山小屋で長蔵小屋は「尾瀬に死す」の平野長靖さんで余りにも有名だが、弥四郎小屋は橘さんという女主人であった。

もつとも、この地方の苗字は九割方が平野さん、橘さん、そして星さんで占められていて、現に同じ十字路口には星さんの山小屋もある。

昭和四十二年の初夏に私は初めて尾瀬を探訪した。大学のクラブ活動が高山植物を研究する生物部であった関係からである。聞けば毎年、水芭蕉の頃に学生をアルバイトで雇ってくれているとのこと。奇特な女将も居たものだと思いきや、先輩に恐ろしく山好きなのがいて弥四郎小屋に住み着き、今では番頭格にまでなってい



て人事権を持っているからという理由であつた。

アルバイトの内容は決して楽なものではなかった。朝は三時起床で朝食の準備から始まり夜は九時まで十八時間労働である。土曜、日曜ともなればワンサカ客がやって来て、定員百五十名の小屋に三百人を超える事もあつた。タタミ一畳に二人寝て、廊下にまで溢れる事もしよっちゆうなのである。クラブの先輩からは美しい尾瀬でたっぷり自然を親しみながら、日当と交通費が支給され、これ以上のアルバイトはない、その上福島県側の檜枝岐村からは若い女性も手伝いにくると聞かされていたが、自然とロマンスを楽しむゆとりなど、ハナツから無かつた。

おまけに一年生の私にはキツイ仕事ばかり回って来る。食事の時間は決まって皿洗いだ。標高千四百メートルの尾瀬で、しかも水芭蕉のシーズンの水は手が切れそうに冷たい雪解け水なのである。

山小屋の朝は早く、午前四時くらいから食堂が賑わい始めるや、私の商売は大繁盛で、洗っても洗っても食器が返ってくる。こういう仕事は「お母さんの仕事」と幼少の頃以来決め付けていた私には、耐えがたい屈辱でもあつた。

朝食の後はフトンの整理、部屋掃除でやっと一息つける時間が来るが、その頃にはさすがの客もカラッポになり、窓越しに見る至仏山の姿に感激し、思わず疲れも忘れるのであつた。

午後は早い時間から登山客が到着し始める。私の係りは各部屋での案内係りだ。山小屋といっても弥四郎小屋は非常に大きく、部屋の種類も床の間付きの立派なものから大部屋まで、様々なランキングがあった。受付の時に女将さんが部屋割りを指示するのだが老夫婦は床の間付きの部屋、行儀の悪そうな若者グループは大部屋へといった具合である。最初は指示される通りに案内していたが、あまり混雑しない日などは若い女性で美人であれば最上級の部屋へ案内し、他の同室者のいないのを良いことに、上がり込んで話し相手をしたものだった。

午後五時から七時までが夕食タイム。これまた二時間、冷たい水とのお付き合いとなる。片付けが終わって最後に従業員全員が遅い夕食となるが、たいてい九時は回っていた。

腹ペコの上、クタクタに疲れているものだから食事の旨い事この上ない。おかずは毎日同じで、味噌汁にゼンマイの塩漬け、キャベツの千切り少々に、向こうが透けて見える程薄く切ったハム。ただしご飯は食べ放題だった。アルバイトだけで常時十名はいたからさぞかし米はたくさん必要だっただろう。

ところで山小屋への荷上げはボツカと呼ばれる担ぎ屋さんに頼っていた。米も味噌も野菜もプロパンガスのボンベまで、みんな人力で運ばれるのである。登山口から小

屋まで我々の足では四時間もかかる道のりを、百キロ近い荷物を担いでボツカさんは毎日やって来た。さすがに「ご苦労様」と頭が下がる思いがした。

或る日の事、一人のおばあさんのボツカが到着し、荷物を開いてビックリ。ビン入りのコカ・コーラが一箱入っている。本数にしてみれば二十四本。殆どがビンの重さであろうに、可哀想な事を頼むものだと依頼主である女将さんを非難したい気にもなつた。

ところが、このコーラ、売り物と思いきや夕食後に女将さんが、「学生さん達はご苦労さんだから、今日はコーラ飲んどくれ」とポンと箱ごとテーブルの上に置いてくれたのであつた。若者にはコーラが一番と思つたのだらうが、その気持ちの温かさに涙が出た。

その夜はことのほか、話が弾み、例の桧枝岐村から来た娘さんとも一緒になつて消灯時刻を過ぎても、ランプの灯を頼りに遅くまで盛り上がった。化粧っ気の全くない女性ばかりだったが、みんな明るく屈託がなかった。コカ・コーラのお陰だつた。

コーラ一つでみんなの気持ちが変わるものかと改めて女将さんに感謝したのは言うまでもないが、山小屋まで運んでくれた年老いたボツカさんにも大いに感謝した。

尾瀬の自然は美しいが、そこにいる人も又、純粹で美しい。私がその後、尾瀬をす  
きになった最大の理由である。